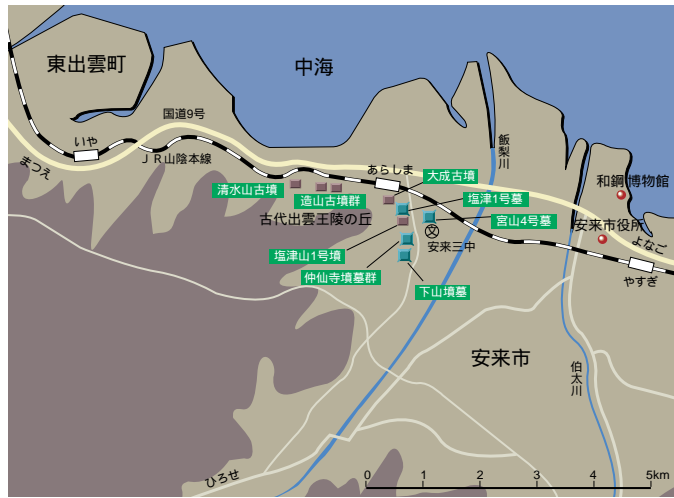


## この本で扱った遺跡分布図



## \*こんな説もある!!

島根県における古墳時代の始まりについては、いまだに解明されていない部分が多くあります。次に紹介するのは、現在もっとも疑問に思われていながら解決していないものと、それらについての説です。

## 島根県の古墳時代の始まり

全国的に見て、島根県はどのくらいの力を持っていたのか?

しかし量が少なく、鏡も1古墳から1枚程度しか出土していない。石製の腕飾りに関しても、鹿島町の奥古墳群からしか出土しておらず、他地域に比べて劣っている感はいないで、あまり大きな力を持っていなかった。畿内政権の王の墓に採用された竪穴式石室が、神原神社・造山1号・3号・大成・大寺・五反田1号・塩津山1号など、多くの前期古墳に採用されている。埋葬施設を見る限りでは、島根県の力も畿内に準ずるものだった。

なぜ、出雲の前期古墳には、方墳や前方後方墳が多いのか?

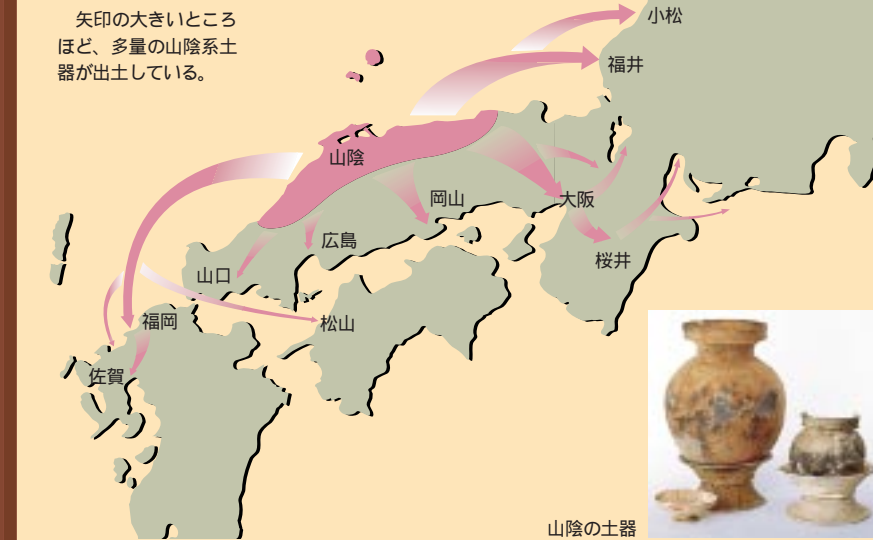
古墳時代前期には全長100mを超える前方後円墳が全国各地で造られているのに比べ、出雲では50~60mの方墳や前方後方墳が、石見では88mの前方後円墳が、隠岐では20mに満たない円墳が最大のものである。古墳の大きさで比較するが、それほど大きな力を持った地域ではない。島根県の前期古墳に納められている副葬品は、全国の古墳のものと同じく変わらない。

四隅突出型墳丘墓を完成した出雲は、前方後円墳よりも伝統的な四角い形をベースにした方墳や前方後方墳の方を重視したから。畿内政権が、出雲の豪族には前方後円墳を造ることを許可しなかったから。

## 考古学最新ニュース

### 西日本を駆けめぐる山陰の土器

矢印の大きいところほど、多量の山陰系土器が出土している。



### 西日本一円に広がる山陰系土器

弥生時代から古墳時代へと時代が移り、日本中で古墳が造られるころ、それまでにない規模で人びとの移動・交流が活発化する現象が見られます。

たとえば山陰地方でも、西日本一円に山陰の人びとが移動していった形跡が発見されています。山陰地方特有の形をした土器が、大量に九州北部・岡山・近畿・北陸など、西日本の重要地点で出土しているのがそうです。

このような土器が移動した形跡は日本中の多くの地域にも見られ、古墳時代が始まるにあたって、日本列島全体に大きな人の動きがあったと考えられます。こうしたダイナミックな人の動きが、「古墳」を造ることに熱中したこの時代の姿の一端をあらわしていると言えるでしょう。



山陰の土器

## 出雲の軌跡

「時代の波を乗り越えて」

この巻では、ここ数十年の膨大な発掘調査によって蓄積された研究成果をもとに、島根県の弥生時代から古墳時代前期にかけての姿を見てきました。この時代を解明するには、弥生時代中期の「青銅器」、弥生時代終りころの「四隅突出型墳丘墓」、古墳時代を象徴する「鏡」や大規模な「古墳」など、いくつかの重要なキーワードがあります。現在、これらのキーワードをもとにした研究が進められていますが、まだまだ解明されていないナソの部分が多く残っています。

現在、弥生時代から古墳時代にかけての島根県は、出雲など東部地方を中心に、特徴ある文化・生活様式が栄えた日本でもユニークな地域として注目を浴びています。古代史といえは、邪馬台国や卑弥呼をめぐる数々の議論が有名ですが、同時代の島根県も邪馬台国に勝るとも劣らない魅力とナソにあふれているのです。

発掘調査から得られる成果は、大地に刻み込まれた、まざりもない祖先の生活の痕跡です。その一つひとつの事実を積み重ねていく作業は地味ですが、着実に古代の歴史像を復元していく手段としては、もっとも正確なものです。

読者のみなさんも、この巻で紹介した数々のナソ解きに挑戦したり、見学できる遺跡をめくったりして、考古学の醍醐味を堪能してみてください。



## \*もっと知りたい人のために

- 全体
- 下篠信行編『古代史復元4 弥生農村の誕生』講談社 一九八九
- 都出比呂志編『古代史復元6 古墳時代の王と民衆』講談社 一九八九
- 前島己基編『日本の古代遺跡20 島根』保育社 一九八五
- 上田正昭編『古代を考える 出雲』吉川弘文館 一九九四
- 近藤義郎編『前方後円墳の時代』岩波書店 一九八三
- 金関忍・佐原眞編『弥生文化の研究』全10巻 雄山閣 一九八六〜一九八九
- 石野博信ほか編『古墳時代の研究』全13巻 雄山閣 一九九〇〜一九九三
- 渡辺貞幸編『古代出雲の栄光と挫折』『日本古代史4 王権の争奪』集英社 一九八六
- 渡辺貞幸ほか編『古代史シンポジウム 大和政権への道』日本放送教育協会 一九九一
- 瀧音能之編『出雲世界と古代の山陰』古代王権と交流7 名著出版 一九九五
- とくに荒神谷遺跡に関する部分
- 足立克己編『荒神谷遺跡 銅剣発掘調査概報』島根県教育委員会 一九八五
- 宮沢明久・柳浦俊一・穴道年弘編『荒神谷遺跡発掘調査概報(2) 銅鏡・銅矛出土地』島根県教育委員会 一九八六
- 佐原眞・水野正好ほか編『銅剣・銅矛と出雲王国の時代』日本放送出版協会 一九八六
- 三宅博士・田中義昭編『日本の古代遺跡を掘る3 荒神谷遺跡』読売新聞社 一九九五
- 島根県古代文化センター編『荒神谷遺跡と青銅器』同朋舎出版 一九九五
- とくに四隅突出型墳丘墓に関する部分
- 山本清編『出雲の古代文化』六興出版 一九八九
- 東森市良編『考古学ライブラリー54 四隅突出型墳丘墓』ニューサイエンス社 一九八九
- 出雲市教育委員会編『四隅突出型墳丘墓の謎に迫る』ワニライオン 一九九五
- 田中義昭・渡辺貞幸ほか編『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』島根大学法文学部考古学研究室 一九九一
- とくに古墳時代前期に関する部分
- 白石太一郎編『古代を考える 古墳』吉川弘文館 一九八九
- 出雲考古学研究会編『出雲における古墳の出現を探る』一九九二
- (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター編『謎の鏡 卑弥呼の鏡と景初四年銘鏡』同朋舎出版 一九八九
- 近藤喬一編『UP考古学選書4 三角縁神獣鏡』東京大学出版会 一九九〇